

「未完了の記憶」

三田国際科学学園高等学校 西啓太

記憶の中の自分はいつも少し悲しそうだった。

どれだけ世界を旅しようと、友達と笑い転げようと、目標を達成しようと、寝る前に思い浮かべる記憶の中の自分はどこか不満げで悲しそうだった。家族とお金に恵まれ世界を旅し、誰よりも幸せで恵まれているという自信と自覚があるのにもかかわらず瞼の裏に再生される記憶の片鱗はいつもどうでもいいものばかりだった。ずっと勉強していたテストで好成績を収めた時の喜びではなく、思い出すのは、他人に馬鹿にされ消えたい思いで歩いた帰路の風景。風邪の時に思い出すのは誕生日にろうそくの火を家族と友達の前で吹き消したあの幸せな瞬間ではなく、お風呂場で感傷に浸りシャワーから流れる水とともに涙を流した時間。人は、いや自分はなぜいつも幸せで楽しいひと時の記憶ではなく、暗く、冷たい思い出ばかりが頭の片隅に常にあるのだろうといつも不思議に思う。それと同時にいつも楽しい思い出を心においておける人であれば今以上に良い人生が歩めたのではないかと考えてしまう。

ある日どうしても頭の隅から離れない、自分がしでかしてしまった失態を、当時現場にいた友人に話してみた。すると、友人はそんなことは全く覚えていないと言った。それは自分にとって青天の霹靂だった。寝る前に何度も思い出しては後悔と罪悪感に浸り、頭の中にある楽しい記憶を蝕んできたその出来事を彼は頭の片隅にも留めてはいなかった。それを知った夜はまたもや寝れなかったが、今度は違う理由だった。周りが新しく煌びやかな思い出を糧にさらなる高みを目指す中自分はずっと過去の記憶に閉じ込められていたのではないかと思いつつもやるせなくなつた。居ても立っても居られなくなって、この現象について自分から調べるようになった。するとこれは自分だけに起きていることではないことが分かった。人は悪い出来事の方が印象に残りやすくその後の人生に与える影響が大きいことが分かった。しかしそれだけでは納得がいかなかった。もしこの先の未来で楽しい思い出よりも、悲しく暗い思い出を思い出すことが必然的に多くなってしまう性質が人間の本能として備わってしまっているのならば、人は前を向けない。そう考えるように

なり、人間はトラウマと恐怖から生涯解放されることはないのではないかと疑問に思うようになった。

しかし長くにわたって考え続けたのち、あることに気づいた。人はおのずと気づかないうちに暗い記憶だけを過去としてではなく現在も続いていることとして認識してしまっているのではないかと。記憶とは人を形成する鏡のようなものであり、楽しい記憶は人の糧となり未来への希望として蓄積される。それと同時に暗く悲しい記憶は私たちにとって「未完了」であり現在も自分の中で解決できていないからこそ頻繁に私たちの心と脳を占領してしまうのではないか。暗い思い出を完全に脳裏から消すすべはなくとも、寝る前に暗く悲しい思い出を思い出してしまうのは自分が弱いからではなく、その思い出がまだ自分の中で解決せずに未完了のままになっているからなのだと自分に言えた気がして少し自分を見直すきっかけになった気がした。

暗い思い出は消えることはないが、その見方はかなり変わったと思う。以前と同じように暗い思い出は瞼の裏で映される。ただ、その映される記憶の断片を以前より注意深く見るようになった。暗い記憶が今を生きる私たちを縛るとき、大事なはその暗い記憶自体ではない。「なぜ今、この暗く悲しい記憶を頭の中で再生しているのか」という問いを自分に問いただせるようになったとき、暗い記憶は私たちを縛るものから、前に進むための重心へと変化する。暗く冷たい記憶をも糧に、己と向き合いながら、今日も私は未来へ歩いていく。